

核実験でまたも日本外交は失敗

大西 広

北朝鮮が核実験を強行した。またも日本外交の失敗である。なぜこの事態を阻止できなかったか。何が我々に欠けていたのか。この機会にしっかり考えておく必要がある。

私の考えでは、北朝鮮の六者協議復帰への努力が日本政府には欠けていた。復帰が遅れても、特に問題はないだろうと高をくくっていたのではないだろうか。北朝鮮がその間にも着々と核開発を進めていたのを甘く見、最近までも北朝鮮の核保有はあり得ないとの判断があったように思われる。この判断ミス日本政府はどう責任をとるのだろうか。もし北朝鮮を六者協議に出させ続けることができているなら、ここまで瀬戸際の政策を北朝鮮はとったであろうか。最後の「核実験カード」を切らせてしまったことを外交の失敗として捉えられるかどうか問われている。

それからもうひとつ、こうして北朝鮮を見た背景に、その体制がすぐにでも崩壊するかのように説く無責任な評論家の言動があると思われてならない。テレビでは重村氏が今夏の水害で穀物生産が去年の半分以下になったと言って、崩壊が近いといつものように述べているが、それならなぜ水害での穀物援助を北朝鮮はほんの少ししか要請しなかったのだろうか(基本は金銭の援助を要請した)。最近では、一部で北朝鮮経済が相当好転しているとの報道も流れ始めており、私自身も今夏の訪問調査でそのことを確認した。基礎食糧は配給でほぼ賄えるようになり、自由市場には工業製品があふれるように並ぶ。が、放っておきさえすれば自然に北朝鮮は崩壊するとの、あるいはすでに殆ど経済関係のなくなった北朝鮮への日本の制裁があたかも有効であるかのような報道が日本で圧倒をする中、結果としての無策を帰結し、ただなすがままにさせてしまったというのが現実である。

日本には言い分がある。これはありうる。が、言い分があるからといって、対中外交や対韓外交を長く放置し、またそれも相俟って北朝鮮に何の接触もしないままにいと、自国の利益さえ守れなくなってしまう。この現実をこそ日本外交はもっと冷徹に見なければならぬのではないだろうか。ただ言い分を主張するだけではなく、時には隣国との連携のために隣国に譲歩する。あるいは、北朝鮮を「対話」のテーブルから逃れられないような様々な手を打ち続ける。外交で求められているのはそうした知略ではないかというのが私の意見である。

(2006/10/11 記)